

囚中の作（高杉晋作）

君見ずや死して忠鬼と為る菅相公

靈魂 尚お 在り 天拝の 峰

又見ずや石を懐き流に投ず楚の屈平

今に至るも人は悲しむ 汨羅江

古より 讒間 忠節を 害し

忠臣 君を 思うて 躬を 懐わず

我も 亦 貶謫 幽囚の 士

二公を 憶い 起して 涙 胸を 沾す

恨むを 休めよ 空しく 讒間の 為に 死するを

自ら 後世 議論の 公なる 有り

君不見死爲忠鬼菅相公 靈魂尚在天拜峰
又不見懷石投流楚屈平 至今人悲汨羅江

自古讒間害忠節 忠臣思君不懷躬
我亦貶謫幽囚士 憶起二公淚沾胸
休恨空爲讒間死 自有後世議論公

解説 獄中であつての作。

語釈 ※忠鬼 忠節に死し神として祭られた幽魂。 ※菅相公 菅原道真をさす。

※靈魂 たましい。 ※天拝 福岡県筑紫野町にある天拝山。 ※懷石投流 五月五日は屈原が湘水の汨羅の淵に身を投じて死んだ日とされる。 ※楚屈平 戦国時代の楚の忠臣。

姓は屈、名は平。 ※汨羅江 湖南省湘陰県の湘水の淵。 ※讒間 讒言して人と人との仲をさくこと。 ※忠節 君に尽くす節義。 ※不懷躬 一身の利害は顧りみない。

※疑諦 官位を下げられ地方に流されること。 ※幽囚 獄屋にとらわれること。 ※二公 屈平と道真のこと。 ※憶起 想い起こす。 ※涙沾胸 涙がとめどなく流れて胸もとを濡らす。 ※議論公 年月を経て後の世に適正な判断をされること。

通釈 君は知っているだろう。死して忠鬼となつて国を護ろうとする菅原道真公の靈魂が太宰府の天拜山に留まつていることを。また、これも知っているだろう、憂国を思い、石をふところに抱き、汨羅の淵に身を投じた楚の屈平であつたが、その屈平を弔う五月五日の行事は、かの中国のみか、わが国にも連綿と続いており、だれ一人として投身の行を哀しみたいまない者はないことを。屈平にしても道真公と同じく、佞人（こびへつらう人）に讒言され、大臣の職を追われ、国の前途を懐い、死を決するに至つたのであつた。昔から姦佞の徒（人にこびへつらう）が忠臣を讒言しておとしめるが、忠臣という者は自分のことはかえりみないのである。自分（晋作）も国家の前途を憂慮するあまり、咎を受け拘束される身となつた。獄舎に繋がれ、今、偲ばれるのは二公の忠節であり、憶い起こすと悲憤の涙が胸もとを濡らす。だが、恨みは一言も洩らすまい。たとい、讒言の為に、生命を落としても、後の世人は忠誠の念から発したものであると、公正な判断を下してくれるであらう。